



北川 達夫 (日本教育大学院大学)

フィンランドで英語

ディゲスティベ?——道行く人に商品を見せ、その英語の商品名を読んでもらう。フィンランドで、そのようなテレビCMがあった。ちなみに商品名は「digestive」。フィンランド語は、綴りどおりにローマ字読みする言語なので、「ディゲスティベ」になるのだ。

フィンランド語はウラル語族に属し、英語とは似ても似つかぬ言語である。では、フィンランド人は英語が不得意かという、そうでもない。最近では、ほとんどの人が仕事に必要な程度の英語はできるようになっている。なぜか?

フィンランドで英語ができないと、大学の授業についていけない。先生も学生も外国人比率が高く、多くの授業が英語で行われているからだ。また、学歴を問わず英語ができないと、会社に就職できない。よほどのローカルな商店でもない限り、海外と日常的な取引があるからだ。つまり、進学するにも就職するにも英語が必要不可欠なのである。

この必要性がフィンランド人の英語力を支えている。だが、油断すると、冒頭の「ディゲスティベ」のように地金が出てくるので楽しい。私はフィンランド人の英語なら、聞けばすぐにわかる。フィンランド語独特の発音法則が見え隠れするからだ。

NEW CROWNで好きなのは、1年生のLESSON 1から、日本人と中国人が英語で会話しているところである。これこそまさに現在の世界の実態だろう。世界中の多様な国の多様な人々と、お互いにとっての外国語である英語で意思疎通する。実にグローバルである。その方針を創刊当時から貫いているのがNEW CROWNである。

NEW CROWNの世界では、あの日本的発音と、あの中国人的発音の英語が飛び交っているのだろうなあ——などと想像するのも、また楽しい。



堀田 龍也 (玉川大学)

なぜ教室でデジタル教科書か

新学習指導要領では、知識・技能を確実に習得させ、習得した知識・技能を活用する学習活動、とりわけ言語活動の充実を通して、思考力・判断力・表現力を育てることになっている。この考え方を受け、新学習指導要領の外国語では、文法事項についてコミュニケーションを支える知識・技能と位置付け、これらをしっかりと習得させ、言語活動の充実により実際に活用することを通じて、コミュニケーション能力を育成していくことになる。

標準授業時数が増えているとはいえ、指導する語数だけ見ても900語程度から1200語程度に増えているなど、習得すべき知識・技能の量も増えているのだから、外国語の指導がのんびりできるようになるわけではない。まして、これらの知識・技能の習得に止まっていたら、新学習指導要領の趣旨を反映できていないといえない。習得した知識・技能を活用する学習活動に多くの時間を割かなければ、コミュニケーション能力など身に付くはずもない。

そこでデジタル教科書の登場となる。デジタル教科書は、教科書に完全に準拠している。教科書の見開きから、必要な説明教材や練習教材を取り出し学習活動に誘うことができる。フラッシュカードはデジタル化されて同梱されているし、絵図はクリック1つで大きくなる。音声は本文をクリックするだけで必要なだけ提示することが可能である。もちろん、紙で提供されてきた従来の教材も同時に市販されるから、教員や学校の実状に応じて選択すればよい。これまで同様、板書は必要であるし、生徒に書かせる指導がなくなるわけではない。

デジタル教科書は、得意な教員だけが使う教材ではなく、すべての教員が日常の授業において、生徒にしっかりと学力を保证するために用いる教材なのである。